

願望表現における「を／が」の 交替について

生 田 裕 子

1. はじめに

日本語の願望表現は、(1)(2)のように「-たい」という接尾辞をともなう。

[NP1が(は) + NP2 を／が + Predicate]

(1) 私が(は) 水 を／が飲みたい。

(2) 私が(は) ポルトガル語 を／が勉強したい。

これらの文は「-たい」をともなうことによって、NP2(「水」や「ポルトガル語」)の位置に2つの格、すなわち「を／が」が現れ得る。本稿は、このような「を／が」の交替が起こる願望表現を考察の対象とする。

この文においては、動詞に接続する「-たい」が状態性を表すため、述語全体が状態性を帯び、その結果目的語に「が」もとることが可能になり、目的語は「を／が」の両方で表されるとされてきた(益岡、田窪1988:94-5)。

しかし、この「を／が」の交替に関しては、次のような疑問点が挙げられる。

第1に、なぜ、(1)(2)のように「を／が」の交替が起こり得るか、ということである。同一の文に2つの格の交替が起こり、どちらの文も文法的である、ということとは、「を／が」の選択が統語的な原因によってのみ起こるのではなく、他の要因が関わっていることを意味する。

「を／が」の交替に関しては統語論のレベルでも様々な研究がなされているが(久野1973、井上1976、Shibatani1977、柴谷1978、Tada1992など)、本稿では、統語論のレベルで既に目的語に「を」と「が」が付与されていることを前提とし、動詞の意味、あるいは動詞が用いられる状況によって「を／が」の選択がなされるという立場をとることにする。

第2に、どのような条件のもとで(3)~(6)のように「を／が」の選択が行われるのか、ということである。

(3) あなたの話 を／?が皆と一緒に聞きたい。(久野1973:54)

(4) 君にこの本 を／?が読んでやりたい。(柴谷1978:266)

- (5) 私はいつまでも夫の帰りをを／?が待ちたい。
 (6) 私は神の存在をを／?が信じたい。

本稿ではこれらの疑問点に答えるために、述語が状態性であることは、目的語に「が」をとるために最低必要な条件であるが、この条件だけでは、すべての文の目的語に「が」をとることを可能にすることはできない、という点を明らかにする。

そして「を／が」の選択条件を説明するために、動詞だけではなく、動詞と目的語の関係について考察する。そしてこの選択条件が、文レベルだけではなく、文脈の中においても普遍的に機能することを示す。

2. 先行研究とその問題点

2.1 久野(1973)

久野(1973)は、「を／が」の交替が等しく可能だとされていた願望表現の文に、次のような使い分けがあると指摘した。以下、先行研究によって指摘された、「が」の場合に容認度が落ちる例を、(A)～(D)の記号で示す。

(A) 目的語と動詞との間に何らかの要素が挿入される時。

- (7) あなたの話をを／?が皆と一緒に聞きたい。(久野1973:54)

(B) 動詞が漢語であるとき。

- (8) 本箱をを／?が購入したい。(久野1973:55)

(7)の容認度の差については久野はいかなる説明もしていない。【註1】(8)については、「『主語が…主語が…』構文が純粋な大和ことば系の動・形容・形容動詞系に由来し、漢語系動詞をこのパターンに用いると、スタイルの不釣り合いを起すことによるのかもしれない」としている。

しかし、実際には(9)(10)のように全く自然だと思われる文も見られるので、(8)の「が」の容認度の低さは、スタイルの不釣り合いのみに起因するものではないと思われる。

(9) ポルトガル語が勉強したい。

(10) 車が運転したい。

2.2 柴谷(1978)

柴谷(1978)は、「僕は水を／が飲みたい」という文の派生について、次のように説明している。

(11) 「『飲む』は状態動詞ではない。しかし、述語繰り上げ規則の適用を受け『-たい』と結合されれば『飲みたい』全体が状態述語となり、直接目的語に『が』でも『を』でも付加することができる。」(柴谷1978:238)

そして、次のア. は以下のような派生過程を経るという。

(12) ア. 僕が 水が／を 飲みたい

イ. [僕 [僕 水 飲む] たい]

ウ. [僕 水 飲みたい]

同一名詞句削除規則／述語繰り上げ規則

エ. [僕が 水 飲みたい]

主語助詞規則

オ. [僕が 水が 飲みたい]

直接目的語助詞規則(ア)【註2】

(ここで派生が終わってもよい)

カ. [僕が 水がを 飲みたい]

直接目的語助詞規則(イ) 随意適用【註3】

キ. [僕が 水を 飲みたい]

助詞削除規則

(柴谷1978:238)

このような規則は統語論の中で「を／が」のどちらも文法的である文を予測するものである。しかし、どのような条件のもとで、(7)(8)のように「が」をとると容認度が落ちるのかを説明することはできない。

柴谷(1978)も久野と同様、「が」が用いられにくい例(13)(14)を挙げているが、これも事実の指摘にとどまっている。

(17)

	<u>他動性が高い</u>	<u>他動性が低い</u>
A. 項の数	2つ以上、すなわち 動作主と目的語	1つ
B. 動性	動作	非動作
C. アスペクト	完了	未完了
D. 瞬間か継続か	瞬間	継続
E. 意志性	意志的	非意志的
F. 肯定か否定か	肯定	否定
G. ムード	現実	非現実
H. 動作主が有生物か無生物か	生物	非生物
I. 目的語が被る影響の大きさ	大きい	小さい
J. 目的語が限定できるか	できる	できない

(Hopper and Thompson 1980:252)

この他動性は、二極化できるものではない。上記のパラミターをより多く満たしたもののほど他動性が高い、というプロトタイプを主要概念としたものであると考えられる（ヤコブセン1987:213）。

Sugamoto(1982)は、願望表現においては動詞が上の他動性のプロトタイプに近い述語ほど「NP2+を」をとり、遠いほど「NP2+が」をとる、としている。

そこで、久野(1973)、柴谷(1978)によって指摘された(A)～(D)の文が「が」をとりにくい原因が動詞の他動性が高いためなのかどうか、見ていくことにする。

2.4 他動性についての検討

2.4.1 目的語と動詞の間に何らかの要素が挿入されるとき

まず、(A)目的語と動詞との間に何らかの要素が挿入されるとき「が」のとりにくさは Hopper and Thompson の他動性のみに起因するのではないことは(7)の例から見て明らかである。

(7) あなたの話をを／?が皆と一緒に聞きたい。

この「聞き(たい)」は、Hopper and Thompsonのパラミターにおける最も重要な「目的語に影響を及ぼす」、つまり対象に、形や位置が変わるなどの物理的な変化が起こるといふ条件を満たしていない。すなわち、他動性の低い動詞であるのに、目的語との間に「皆と一緒に」といふ要素が挿入されることによって、「が」がとりにくくなる。よって、(A)の構造をもつ文においては、動詞の他動性は「を/が」選択の決め手とはならず、ほかの要因がかかっているということになる。

2.4.2 漢語動詞と他動性

次に、(B)動詞が漢語であるときはどうであろうか。

先に述べたように、久野(1973)の「漢語動詞は『～が～たい』という大和ことは系とスタイルの不釣り合いを起すため」「が」をとりにくい、という指摘は(9)(10)(18)の文がごく自然な文であることから、不充分だと言える。

- (9) ポルトガル語が勉強したい。
- (10) 車が運転したい。
- (18) 部屋が掃除したい。

しかし久野の挙げた(8)の文を初めとし、次のように(9)(10)(18)に比べて容認度が落ちる例も見られる。

- (8) 本箱を/?が購入したい。
- (19) 一刻も早く工事を/?が開始したい。
- (20) 何としても任務を/?が遂行したい。

ここで注目すべきは、(9)(10)(18)と(8)(19)(20)の間には大きな相違があるということである。それは、前者の動詞は単独でも用いられるのに対し、後者の動詞は前に目的語が提示されていなければ、単独での発話は不可能だという点である。

- (21) 勉強したい。
- (22) 運転したい。
- (23) 掃除したい。

- (24) ? 購入したい。
 (25) ? 開始したい。
 (26) ? 遂行したい。

これは、後者の動詞が必ず目的語を必要とする他動詞であり、他動性の第1番目のパラミター「項を2つ以上とる」という原則に当てはまる。これに対し、「勉強する」「運転する」「掃除する」などは、自動詞としての用いられ方も可能であり、必ずしも2項を必要としない、他動性の低い動詞だと言うことができる。これは、前者は動詞がすでに目的語を含んでおり、後者は含んでいない、と言い換えることができる。このことは次のような例からも裏付けることができる。

- (21)' 勉強をしたい。
 (22)' 運転をしたい。
 (23)' 掃除をしたい。
 (24)' * 購入をしたい。
 (25)' * 開始をしたい。
 (26)' * 遂行をしたい。

このように漢語動詞の「を／が」の選択は、他動性のパラミターの1つ、「項が1つか2つ以上か」という基準に基づいて行われているということがわかる。

2.4.3 三項動詞と他動性

「～が～に～を」という、必須項を3つとる三項動詞は次のようなものがある。

(27) a. 単独の動詞である三項動詞

もらう／あげる、いただく、与える、借りる／貸す、預かる／預ける、
 教わる／教える、送る、入れる、移す、置く、かぶせる、詰める等

b. 複合構造をもつ三項動詞

動詞の語幹+(s)aseru、動詞のて形+あげる、動詞のて形+もらう等

どの動詞が「が」をとりやすいかというアンケート調査を行ったところ、いずれも「が」はとりにくい、という結果が得られた。【註4】

このように2つの種類の三項動詞について、他動性が高いために「が」をとれないか検討したが、単独の動詞である三項動詞も、複合構造をもつ三項動詞も、動詞の他動性が「を／が」の選択を決める唯一の要因ではないことがわかった。

2.4.4 複合動詞と他動性

最後に(D)をとり上げ、動詞が複合動詞であるとき目的語に「が」をとりにくいのは、複合動詞の他動性の高さに原因があることを明らかにしたい。

複合動詞は格支配によって、いくつかの種類に分けることができる。この分類は影山(1993)に示されているものに基づく。

(28) I類：前項、後項の格関係が一致

雪が降り積もる＝雪が降る、雪が積もる

犬が芝生を踏み荒らす＝芝生を踏む、芝生を荒らす

II類：前項が格関係を支配

雨が降り出す＝雨が降る、*雨が出す

ご飯を食べ過ぎる＝ご飯を食べる、*ご飯を過ぎる

III類：後項が格関係を支配

期限が差し迫る＝*期限が差す、期限が迫る

事故を引き起こす＝*事故を引く、事故を起こす

IV類：前項、後項の格関係は消滅し、新しい格関係が成立

味が引き立つ＝*味が引く、*味が立つ

事故を取り締まる＝*事故を取る、*事故を締まる

(影山1993:103)

このうち、I類とIII類の複合動詞を含む文は次のようなものであり、いずれも「が」よりも「を」の方が容認度が高い。

(29) この机の上のほこりを／?が払い落とししたい。

(30) 何とかして息子を／?が呼び戻したい。

(31) a. ただそこに、予言者エゼキエルの「そして私の目をひたすら神の心に置く」という句を附け加えたいです。(曾野綾子、尻枝正行『別れの日まで』新潮文庫 p.75)

- b. ? ただそこに、予言者エゼキエルの「そして私の目をひたすら神の心に置く」という句が付け加えたいです。

(32) ここで大きな花火を／?が打ち上げたい。

(33) あの二人を／?が引き裂きたい。

以上の複合動詞のうち、(29)(30)(31)の「払い落とす」「呼び戻す」「付け加える」はⅠ類にあたり、(32)(33)の「打ち上げる」「引き裂く」はⅢ類にあたる。これらの動詞の共通点は何であろうか。それは、後項動詞が対象の物理的変化を表す他動詞だということである。

石井(1983、1987)は、複合動詞の成立条件について考察しており、次のように述べている。(ただし「書き切る」のように後項が補助動詞化したものは除かれている。)

「(複合動詞の：引用者注) 両項および後項動詞(つまり後項要素になれる動詞)には、対応要素を有する自動詞あるいは他動詞(『上がる』→『上げる』など)が多く、前項動詞にはそうでない動詞が多い、という傾向(傾向としては、他動詞の方が顕著なようである)がある。・・・自動詞と対応する他動詞は、主体の動作を表すと同時に客体の変化をも表す“動作=変化動詞”である。このようなことから、上の傾向は、変化動詞(『合う』『上がる』『立つ』『付く』など)あるいは動作=変化動詞(『上げる』『倒す』『出す』『通す』など)がここで後項要素となり、動作動詞(『打つ』『押す』『書く』『突く』など)が前項要素となる、と言い換えることができる。」(石井1987:57)

このような観点から、(29)～(33)の複合動詞の後項動詞の「落とす」「戻す」「加える」「挙げる」「裂く」は対応する自動詞をもつ他動詞であり、動作=変化動詞であると言える。

よって、(29)～(33)の複合動詞は後項動詞が他動性の高い動作=変化動詞であるため、目的語に他動性が低いことを示す「が」をとりにくい、と結論づけることができる。

また、後項が前項を修飾するⅡ類の複合動詞は、以下のようなものである。

(34) 早く食事を／?が食べ始めたい。

(35) 早く食事を／?が食べ終えたい。

Ⅱ類の複合動詞の後項に分類されるものは、「始める」「終わる」「寄せる」

「加える」「入れる」「抜く」「流す」など様々で、必ずしもⅠ、Ⅲ類で見たような他動性の高いものではない。そもそもⅡ類は前項が主要素で後項は前項を限定するなどして修飾しているので、目的語の格の選択は前項の性質に基づいているとも考えられる。前項はどのような動詞をとり上げてよいので、単独の動詞の考察に準じることにし、本稿ではⅡ類を複合動詞の枠の中でとり扱う必要がない、とみなす。

よって、Ⅱ類の複合動詞は後で行う単独の動詞がどのような「を／が」の選択をしているか、という考察のなかに含めることにする。

さらにⅣ類の複合動詞も、「取り締まる」など、一語化したものなので、これもⅡ類同様、後の単独の動詞の考察に含めることとする。

では、Ⅰ～Ⅳ類のいずれにも分類されないが、動詞の「て形」とアスペクト形式を表す接尾辞から成る述語（「～てみる」「～てしまう」「～ていく」「～ておく」「～ている」）はどうだろうか。実際には以下に示すように「を」が用いられるものがほとんどである。

(36) a. 面白半分に劇団を作ってみたいが、手伝ってくれないか。(遊戯作
『ほんとうの私をもとめて』集英社文庫、p.170)

b. ?面白半分に劇団が作ってみたいが、手伝ってくれないか。

(98/16%)【註5】

(37) 彼が私にした仕打ちを/?が許してしまいたい。

(38) a. 今後もさらに論を深めていきたいと考えているが、とりあえず学会に向けてはなつ私の第一の矢、という性質を有している。(漱石『巖とまじめん』新潮文庫、p.79)

b. * 今後もさらに論が深めていきたいと考えているが、とりあえず学会に向けてはなつ私の第一の矢、という性質を有している。

(39) a. その私から見て、鈴木氏のこの論文は到底賛同し難いものであり、ほとんど出鱈目といっていいものであると思えることをを、まず明言しておきたい。(『巖とまじめん』p.10)

b. * その私から見て、鈴木氏のこの論文は到底賛同し難いものであり、ほとんど出鱈目といっていいものであると思えることが、まず明言しておきたい。

(40) a. このままずっと海を見ていたい。

b. ? このままずっと海が見ていたい。

これらのアスペクト形式を抜き出して、他動性の高い動詞・低い動詞と組み合わせても、アスペクト形式がつくと「が」をとりにくくなる傾向がある。

2.4.5 Sugamoto(1982)に残された問題

ここまで久野(1973)、柴谷(1978)によって指摘された(A)～(D)の文の非文法性がSugamotoの提示した他動性の枠組みで説明できるかをみてきた。その結果、(B)漢語動詞 (D)複合動詞の場合は、動詞の他動性が高いため目的語に「が」がとりにくいことがわかった。

しかし、この枠組みでは依然(A)目的語と動詞との間に何らかの要素が挿入されると(C)動詞が三項動詞であるとき、なぜ「が」がとりにくいのか説明できない。

(A)～(D)いずれにも当てはまらないが、「目的語+述語」のみから成る次のような文も、一文で判断したときに、極めて目的格として「が」をとりにくい。

- | | |
|--------------------------------|----------|
| (41) 神の存在を／* <u>が</u> 信じたい。 | (98/8%) |
| (42) 彼の帰りを／* <u>が</u> 待ちたい。 | (100/6%) |
| (43) 全ての人を／* <u>が</u> 愛したい。 | (100/8%) |
| (44) 生徒全員の名前を／? <u>が</u> 覚えたい。 | (96/36%) |

これらの述語は、いずれも目的語に物理的な影響を及ぼす他動性の高い動詞ではない。それにもかかわらず、「が」がとりにくい。

2.5 Fujimura(1989)

Fujimura(1989)は、Hopper and Thompson(1980)の他動性の概念に基づき、日本語の目的語における「を／が」の交替について考察しているが、動詞とともに動詞のとする目的語の性質に着目し、独自のパラ미터を提示している。それは次のようなものである。

(45)	「が」の方がよい	「を」の方がよい
NP2の性質 (目的語)	-影響を受ける -限定できる 指定できない 一般的 具体的 非人間 三人称 新情報	+影響を受ける +限定できる 指定できる 特定の 抽象的 人間 一人称 旧情報
動作主の性質	一人称 主題	三人称 提言
アスペクト	未完了	完了
ムード	-現実 潜在的	+現実 顕在的

(Fujimura1989:250)

NP2の性質の1つ目の項目「影響を受ける(affecté)」と2つ目の「限定できる(déterminé)」はHopper and Thompsonのものと同様である。Fujimuraは「を／が」の選択の基準が、目的語を限定できるかどうかに関わってくる例として、次のような文を示している。

- (46) a. 車が売りたい。
b. 車を売りたい。
- (47) a. ? 山田さんの息子が殺したい。
b. 人が殺したい。
- (48) a. ?ともちゃんが愛せないような人は普通じゃない。
b. 赤ん坊が愛せないような人は普通じゃない。(Fujimura 1989:246)

ここでFujimuraは、「職業として車が売りたい」と言うときには(46a)のように「が」を用いるのに対し、「私の車を売りたい」というように売る車が限定され

ている場合には(46b)のように「を」を用いる、と説明している。同様に、(47a)(48a)では対象が限定されており、(47b)(48b)では対象は一般的な人である。

しかし、願望表現の次のような文はどうであろうか。

(49) 人を／?が信じたい。

(50) 人を／?が愛したい。

これらの文は動詞の他動性が低く、目的語も一般的で限定できない。Fujimuraの示す「が」をとり得る条件を満たしていながら、なおも「が」をとりにくい文が存在する理由の説明が必要である。

2.6 大江(1979)

大江(1979)は、願望の「-たい」を伴う文において、「が」をとりにくい例があることを指摘している。また、文のどの部分に焦点が置かれるかによって、「を／が」の選択が決まる、として(51)(52)の例を挙げ、以下のような説明をしている。

(51) 窓を／?がしめたい。

(52) あかりを／?が消したい。(大江1979:253)

「これらの文で助詞ガを用いるとなにか不自然な調子になる。話し手はもとより聞き手も『窓があって、それがあいている』こと、『あかりがあって、それがついている』ことを知っている。つまり、場面上、窓およびあかりの存在と状態は話し手と聞き手に共有された前提となっているから、単に『窓』と『あかり』にだけでなく、『窓をしめる』『あかりを消す』に、あるいは特に『しめる』『消す』に焦点を置く方がよいわけである。上述の不自然さは『焦点のずれ』から来ている。しかし、窓およびあかりがいくつかある場合、ガを用いて次のように言うことはもちろん可能である。

(53) あの窓がしめたい。

(54) あそこのあかりが消したい。」(大江1979:253)

これは、「窓があって、それがあいている」あるいは「あかりがあって、それがついている」状況でなければ、「窓をしめたい」「あかりを消したい」とは思わない、ということである。またそのような状況で「が」を用いると「窓が」「あかりが」に焦点がきてしまい際立たせる必要のないところが際立ってしまい、不自然な文になるということであろう。

しかし、この「焦点のずれ」が、(A)～(D)の文の不自然さの原因であるのかを考える必要がある。

また大江は、次のようにも述べている。

「よりふつうのガを有する『(ぼくは)水が飲みたい』(「水」に音韻上のきわだちがない場合)などにおいても、なお、『水』が焦点であり、話し手は『あるものを飲みたい』ことを前提にし『それが水である』と主張するのはいささかこっけいである。

一般的にヲよりガを好む『～たい』は、・・・『飲みたい』『食べたい』『見たい』『読みたい』『買いたい』など比較的少数であり、『使いたい』『こわしたい』『やめたい』等々となるにつれて、ガとヲの比は次第に変わりヲが圧倒的となる。また、『かたづけたい』『とりつけたい』『とりよせたい』『聞きとりたいたい』など比較的長い(複合)動詞+タイではヲが支配的であるとして一般化していることができる。つまり、冒頭では疑いを表明したが、焦点の位置以外では、ガをとりやすいか否かという問題は、タイがつく動詞が何かということ、さらにその長さ(拍の数)をも全く度外視してはならないのではないかと思う。」(下線部は引用者による)。(大江1979:252)

大江は上記の「タイがつく動詞がなにかということ」という点について、「指摘に値する」こととして次のように述べている。

「ガを好む・・・文は、あるものの所有または享受が願望されていることを示す。つまり、これらの文でタイが結びつく動詞はなんらかの意味で『私』の方向への吸収、吸引を表す。これに対して、逆に『私』から外に向かったの放出、離脱を表わすような動詞がある。もちろんすべての動詞がいずれかに分類されるわけではないが、二つの動詞の意味的型は23a, b(本稿の(55a, b)にあたる:引用者註)のように図示される。

(55) a. 私●← b. 私●→」(大江1979:252)

大江の提示する「焦点の位置」は、森田(1988)でも指摘されている。ある文が

「文」としてのみでなく、「発話」として状況に適しているかどうかということが、「が」がとれるか否かに関わってくる場合もある。すなわち、文脈や発話の状況も「を／が」を選択に際して考慮されなくてはならない、ということである。

但し、大江は「焦点の位置」を「タイがつく動詞が何かということ」、「長さ（拍の数）」と別個の要因としてとらえているが、この3つの原因は互いに相関関係をもっているという包括的な説明が必要である。

2.7 先行研究に残された問題

先行研究を検討した結果、残された問題は次のようなものが挙げられる。

- ① 久野(1973)、柴谷(1978)、Tada(1992)のような文の構造の視点からだけでは、「を／が」の使い分けの原理は説明できない。
- ② 動詞の意味を観察する必要があるが、他動性のパラミターでは「を／が」の使い分けが説明できるもの（漢語動詞・複合動詞）と、できないもの（三項動詞・動詞と目的語の距離が離れている文・「信じる」「殺す」「待つ」などの動詞）があるので、パラミターの修正が必要である。

3. 願望表現における「を／が」の選択

ここでは、「が」をとり得る環境が可能表現より限られている願望表現をとり上げ、先行研究で残された問題を解決できるような仮説を提案する。

3.1 「を／が」の分布

「を／が」選択の本質を支配している原理は何であるのかを見極めるため、まず、必須項と「-たい」をともなう述語のみから成る文において、実際にどのような述語が「が」をとりやすく、どのような述語が「を」をとりやすいのか、実例も含めてその言語事実をしてみることにする。以下にその観察の結果を示す。

まず、単独の和語動詞から検討する。以下の動詞は「を／が」のどちらもとれる例である。

- (56) a. 「何が言いたいんですか？」（勝鹿北屋『Master Keaton 6』小字館 p.45）

- b. 現代文の論説文を読むといつも必ず同じ気分を味わわされる。何を言いたいのかまるっきり理解できないのだ。(清水義範『国語入試問題必勝法』講談社 p. 33)
- (57) a. 「さっそく私の報告が聞きたいのだね。」(『Master Keaton 8』p.7)
 b. 今は引退してタンゲルウッドにひっそりと住んでいるペリー夫妻を訪ねて一度じっくり話を聞きたいと思っていたが、93年10月その夢が実現した。(『小澤征爾NOW』音楽之友社 p.118)
- (58) a. 「でも普通のひとは一恵とは違うわよ。あんたみたいに何がやりたいってちゃんときまってるひの方が少ないのよ。」(内館牧子『ひらり 1』講談社文庫 p.53)
 b. むかし、松竹の試験をうけて私は落ちたが、役者をやりたいという気持ちは消えたわけではない。(遠藤周作『ほんとうの私を求めて』集英社文庫 p.170)
- (59) a. 「そう、ケルンには大聖堂があったわね・・・大聖堂が見たいわ。」(『Master Keaton 2』p.6)
 b. 「だから、私が、スタイルズ荘を訪ねたかったのは、実の父かもしれぬりキュール・ポアロが、イギリスで最初に名前をあげた場所を見なかったことが目的だったのですが・・・。(西村京太郎『名探偵に乾杯』講談社文庫 p.69)

これに対し、(60)~(69)は「を」よりも「が」の容認度が落ちる例である。

- (60) 生徒の名前を／?が覚えたい。
 (61) ハエを／?が殺したい。
 (62) 早く進路を／?が決めたい。
 (63) 被告のアリバイを／?が調べたい。
 (64) 溺れた子供を／?が救いたい。
 (65) モネのアトリエを／?が訪ねたい。
 (66) 人生の目標を／?が見つけたい。
 (67) 辛い思い出を／?が忘れたい。
 (68) 違う。好きな仕事を／?が持ちたいだけです。(『ひらり 1』p.368)
 (69) 「親方、小さいながらうちは秋田では老舗の造り酒屋です。本人が兄と一緒に会社を／?が継ぎたいと申しておりますので。」(『ひらり 1』p.92)

どのような和語動詞が「が」をとりやすく、どのような和語動詞が「が」をと

りにくい分類した結果を、実例で挙げなかったものも含めて以下の表にまとめる。これらの動詞の抽出は、『日本語基本動詞用法辞典』の中の二項動詞（計271語）から行い、「?無くしたい」「?落としたい」など「-たい」とそぐわない動詞はとり除いた。【註6】

ここで「を／が」がとりやすい、とりにくい、というのは、「無標の文（特殊な場面を設定しなくても適格文だと判断できるもの、すなわち談話の冒頭での発話が可能なもの）として」という基準に基づいて行っている。【註7】尚、ある動詞が目的語に「が」ととれるか否かは、判断する人によって差があり、この分布は絶対的なものであるとは言えない。この分布はあくまでも「が」ととれる動詞の傾向を把握するために提示するものである。

(70) 和語動詞述語の分類

Aグループ・・・「が」をとりにやすいもの
編みたい 言いたい 植えたい 買いたい 飼いたい 書きたい 着たい 聞きたい したい 建てたい 食べたい 作りたい 習いたい 飲みたい 始めたい 見たい 脱ぎたい 焼きたい やりたい 読みたい
Bグループ・・・「が」をとりにくいもの
洗いたい 改めたい 愛したい 諦めたい 上げたい 開けたい 温めたい 扱いたい 集めたい 当てたい 表したい 生かしたい 祝いたい 浮かべたい 受けたい 動かしたい 写したい 訴えたい 打ちたい 売りたい 得たい 選びたい 追いたい 終えたい 拝みたい 起こしたい 行きたい 押したい 押さえたい 驚かしたい 折りたいた 覚えたい 降ろしたい 隠したい 囲みたい 重ねたい 飾りたい 片付けたい 傾けたい 語りたいた 固めたい かまいたいた かみたいた 乾かしたい 考えたい 感じたい 決めたい 切りたいた 崩したいた 配りたい 組みたい 比べたい 加えたい 消したいた 削りたいた 蹴りたいた 越えたい 試みたい 越したいた 断りたいた ころがしたいた 殺したいた 壊したいた 探したいた 裂きたいた 避けたい 下げたい 刺したいた 指したいた 誘いたいた 定めたいた 覚ましたいた 叱りたいた 敷きたいた 縛りたいた しまいたいた 示したいた 締めたいた 調べたいた 知りたいた 記したいた 信じたいた 吸いたいた 救いたいた 過ごしたいた 進めたい 勧めたい 捨てたい 滑りたいた 攻めたいた 責めたいた 添えたい 揃えたい 剃りたいた 育てたい 耐えたい 倒したいた 炊きたいた

抱きたい	確かめたい	足したい	出したい	助けたい	尋ねたい	訪ねたい
叩きたい	畳みたい	断ちたい	楽しみたい	頼みたい	騙したい	試したい
ためたい	頼りたい	縮めたい	散らしたい	使いたい	捕まえたい	
突きたい	伝えたい	続けたい	包みたい	つなぎたい	つぶしたい	
積みたい	手伝いたい	照らしたい	通したい	解きたい	閉じたい	
届けたい	飛ばしたい	止めたい	取りたい	なおしたい	流したい	
眺めたい	殴りたい	投げたい	鳴らしたい	並べたい	逃がしたい	
握りたい	憎みたい	煮たい	縫いたい	抜きたい	盗みたい	塗りたい
残したい	乗せたい	伸ばしたい	述べたい	計りたい	履きたい	運びたい
はさみたい	始めたい	はずしたい	話したい	生やしたい	払いたい	
はりたい	引きたい	弾きたい	引っ張りしたい	冷やしたい	開きたい	
拾いたい	広げたい	ふきたい	吹きたい	防ぎたい	ぶつけたい	踏みたい
増やしたい	振りしたい	減らしたい	干したい	ほめたい	掘りたい	
巻きたい	曲げたい	増したい	混ぜたい	待ちたい	招きたい	真似たい
守りたい	回したい	磨きたい	見せたい	見つけたい	認めたい	迎えたい
むきたい	結びたい	用いたい	戻りたい	求めたい	燃やしたい	焼きたい
養いたい	休みたい	休めたい	雇いたい	破りたい	やめたい	ゆずりたい
ゆでたい	許したい	寄せたい	呼びたい	喜びたい	弱めたい	沸かしたい
分けたい	渡りたい	忘れたい	笑いたい	割りたい		

次に、漢語動詞を見ていく。これもまた、『日本語基本動詞用法辞典』から79語の漢語動詞を抽出して「～たい」を伴ったときに「を／が」のどちらをとれるかを判断したものである。

漢語動詞については、第2章 2.4.2 節でも考察を行った。その結果、「漢語＋する」という形をもつ漢語動詞は2種類に分けることができた。すなわち、自動詞としても振る舞える「勉強する」「運転する」のような動詞と、必ず目的語をとる「購入する」「開始する」のような動詞である。前者の動詞は「勉強をする」「運転をする」などのように、「漢語＋する」の「漢語」の部分が「を」をともなって目的語となることができた。しかし、後者の漢語動詞は「*購入をする」「*開始をする」のように漢語の部分为目的語としてとることはできない。そして「勉強する」というタイプの動詞は動詞のなかに目的語を含んでおり、目的語は必須項ではないため、「必須項を2つとる」という他動性の条件に必ずしも当てはまらない。

このことを踏まえて、79語の漢語動詞を検討する際に、これらの漢語動詞が「漢語を＋する」という形をとれるかどうかを同時に示していくことにする。

まず始めに「を／が」ともにとれる漢語動詞の例文を挙げる。

- (71) a. 車を／が運転したい。
 b. 車の運転をしたい。
 (72) a. 眼を／が手術したい。
 b. 眼の手術をしたい。
 (73) a. ポルトガル語を／が勉強したい。
 b. ポルトガル語の勉強をしたい。

以上に示したように、「を／が」両方をとれる漢語動詞はいずれも「を」を挿入して「漢語を+する」とすることができる。

次に「が」をとりにくい漢語動詞の例文を挙げ、同じく「漢語を+する」とできるかについても併記する。

- (74) a. 修論を／?が完成したい。
 b. * 修論の完成をしたい。
 (75) a. 計画を／?が実行したい。
 b. * 計画の実行をしたい。
 (76) a. 世界を／?が支配したい。
 b. * 世界の支配をしたい。

(74)~(76)は、「漢語を+する」という形にすることができない漢語動詞で、いずれも目的語に「が」をとりにくい。この結果と、(71)~(73)の結果から、「漢語を+する」の形にできること、すなわち漢語動詞に目的語が含まれていることが、目的語に「が」をとれる条件である、ということが言える。

以下に、どのような漢語動詞が「が」をとれるかまとめたものを示す。

(77) 漢語動詞述語の分類

Aグループ・・・「が」をとりやすいもの
運転したい 修理したい 手術したい 出版したい 勉強したい 輸出したい

輸入したい	掃除したい	料理したい	旅行したい		
Bグループ…「が」をとりにくいもの					
案内したい	遠慮したい	我慢したい	歓迎したい	感謝したい	完成したい
記憶したい	教育したい	許可したい	記録したい	禁止したい	工夫したい
計画したい	経験したい	計算したい	決心したい	欠席したい	決定したい
研究したい	検査したい	建設したい	見物したい	肯定したい	催促したい
刺激したい	試験したい	支度したい	実験したい	実現したい	実行したい
質問したい	指導したい	支配したい	受験したい	主張したい	出発したい
準備したい	紹介したい	使用したい	招待したい	承知したい	証明したい
信仰したい	信用したい	推薦したい	発音したい	発見したい	発行したい
発表したい	発明したい	表現したい	報告したい	訪問したい	募集したい
保存したい	翻訳したい	命令したい	約束したい	用意したい	要求したい
予防したい	製造したい	整理したい	説明したい	世話したい	選択したい
想像したい	相談したい	尊敬したい	代表したい	注意したい	注文したい
通過したい	都合したい	訂正したい	理解したい	利用したい	練習したい
連絡したい					

次に、第2章で既に検討した三項動詞について、分類の結果を示す。

(78) 三項動詞述語の分類 (第2章 2.5.3 参照)

Aグループ…「が」をとりにくいもの					
なし					
Bグループ…「が」をとりにくいもの					
あげたい	借りたい	教わりたい	置きたい	もらいたい	いただきたい
与えたい	貸したい	預かりたい	預けたい	教えたい	送りたい
入れたい	移したい	かぶせたい	詰めたい		

これらの結果から次のようなことがわかる。

まず「が」しかとれない述語は存在しない。大きく言って、「を／が」どちらも自然にとれるグループ (Aグループ) と、ある文脈を設定しなければ「が」が

とれず、一文では「を」の方が自然にとれるグループ（Bグループ）の2つに分かれる。

動詞の種類別に見ると、Aグループに分類できるものは、

和語動詞・・・19／216語

漢語動詞・・・12／79語

三項動詞・・・0／16語

という結果になる。

このように「を／が」が共に自然にとれる述語よりも「を」をとる方が自然な述語の方が圧倒的に多い、という2点の事実からも前述の柴谷(1978)やSugamoto(1982)の願望表現において目的語は「が」をとるのが典型である、という考察は事実に反することがわかる。

3.2 仮説

上記の表の、無標の文においても「を／が」の交替が比較的自由的なAグループの述語と、無標の文としては「が」がとりにくいBグループの述語を比較検討し、次のような仮説を立てることにする。

(79) 仮説1：願望表現において、すべての述語【註8】は目的語に「を」をとり得る。

(80) 仮説2：対象が想定されていなくても欲求が起り得る述語は目的語に「が」をとることができ、対象が想定されていなくては欲求が起り得ない述語は「が」をとりにくい。

もしこの仮説が正しければ、「が」をとり得る述語は、具体的な欲求の対象をまだ思い浮かべていないことを表す不定代名詞「何か」と共起できるはずである。そのことを示すために、AグループとBグループの述語がそれぞれ「何か」と共起できるか以下のテストを行ってみた。

「が」をとりやすいAグループの述語

(81) 何か言いたいんだけど、うまい言葉が見つからない。

(82) ああ、何か食べたいなあ。

(83) ストレスの発散にパーッと何か買いたいなあ。

- (84) 花嫁修業に何か習いたい。
 (85) 働いただけじゃなくて何か勉強したい。

「が」をとりにくいBグループの述語

- (86) ? 何か開けたいなあ。
 (87) ? 何か殺したいなあ。
 (88) ? 何か覚えたいなあ。
 (89) ? 何か待ちたいなあ。
 (90) ? 何か購入したいなあ。

やはりBグループの述語が「何か」を伴うと、発話としては非常に不自然である。第2章で引用したFujimura(1989)の表(45)は「新情報を表す項は『が』をとりにやすく、旧情報を表す項は『を』をとりにやすい」というパラメーターを設けていたが、これと仮説2は重なる部分がある。つまり、Fujimuraは旧情報(moins informatif)、すなわち談話の中で既に提示された項は「を」をとりにやすい、としているが、願望表現の述語の中には既に「対象の存在を前提としている」という意味が内在しているものがあるのである。このような述語が上の表のBグループの動詞である(ただし、この中には他動性の高いものも低いものもある)。(87)は「何でもいから何か殺したい」から「では、ハエを・・・」という状況は(普通は)考えにくい。その辺にブンブンと飛んでいるうっとうしいハエがいるから初めて「(そのハエを)殺したい」と思うのである。このように「話し手の念頭に対象が存在している」という前提がなければ発話不可能な述語は、Fujimuraのいう「旧情報」を表す「を」はとれるものの、「が」はとりにくい。

3.3 仮説に対する反例

ここで疑問点が残る。それは、(91)(92)のように「が」をとれるのに「何か」と共起できない動詞があるのは何故か、ということである。これは、仮説2に対する反例である。

- (91) a. ? 何か建てたい。
 b. 家が建てたい。
 (92) a. ? 何か生みたい。

- b. 子どもが生みたい。

3.4 仮説の修正

動詞のみでなく目的語も考慮し、仮説2を、仮説3のように修正することにする。

- (93) 仮説2：対象が想定されていなくても欲求が起り得る述語は目的語に「が」をとることができ、対象が想定されていなくては欲求が起り得ない述語は「が」をとりにくい。
- (94) 仮説3の前提：対象がまったく不定である環境では欲求は生まれ得ない。
- (95) 仮説3：対象の属するカテゴリーが想定可能で、その中の選択肢から対象を指定する multiple-choice式【註9】の述語は、目的語に「が」をとることができる。
一方、そのようなカテゴリーが想定不可能な述語は、状態性の接尾辞をとまうにもかかわらず、「が」をとりにくい。

但し、この仮説3と仮説2は無関係ではない。仮説2の「対象が想定されていなくても欲求が起り得る動詞」とは、まったく対象が予測不可能というのではなく、動詞によってある程度対象が限定されてくるので、対象を具体的に指定しておく必要がないということである。

また、仮説2の「対象が想定されていなくては欲求が起りえない」とは、対象の属するカテゴリーが想定できなくては、欲求が起りえない」ということである。

「対象のカテゴリーが想定可能である」というのは、次のようなことである。

まず、もう一度「が」もとれるAグループの動詞を見てみると、「食べたい」「飲みたい」「見たい」「書きたい」などが並んでいる。いずれも対象として「食べ物」「飲み物」「文書」などになる。

あらゆるものを、モノ【註10】とコトに分類すると、これらの対象は、モノに限られる。それだけでなく、このモノをさらに生物と非生物に分類すると、非生物に限られる。さらに、その中の「食べ物」「飲み物」「文書」のみに限られ、

その中から対象を指定するのである。

すると、これら「食べたい」「飲みたい」などの動詞が共起しうる「何か」とは、まったくの不定を表すのではなく、ある範囲は設定されているが、指定はできないことを表すものだと考えられる。

これに対し、「が」をとれないBグループの動詞は、「信じる」「待つ」「覚える」などは、対象としてモノもコトも考えられ、対象として何をとるのか予測するのは不可能である。すなわち、動詞がとり得る対象がどのようなカテゴリーに属するのかを想定することはできない。

カテゴリーが想定できるかどうかで、「何か」を伴った文の容認度に差が出てくる。次にその例を示す。但し、これはあくまでも相対的に見て、カテゴリーが限られているか限られていないかを判断したものである。

(96) 「読みたい」・・・対象のカテゴリーが非生物の中の「文書」に限定されている。よって、「が」もとれる。

- a. 何か読みたい。
- b. 本が読みたい。

(97) 「建てたい」・・・対象のカテゴリーが非生物の中の「建造物」に限定されている。よって、「が」もとれる。

- a. ? 何か建てたい。
- b. 家が建てたい。

(98) 「殺したい」・・・対象のカテゴリーが生物なら何でもよい。
よって、「が」をとれない。

- a. ? 何か殺したい。
- b. ? ハエが殺したい。

(99) 「覚えたい」・・・対象のカテゴリーが生物も非生物もありうる。
よって、「が」をとれない。

- a. ? 何か覚えたい。
- b. ? 生徒全員の名前が覚えたい。

仮説2の反例であった(91)(92)は、なぜ「何か」と共起できないかと言うと、目的語が非生物の中でも「建造物」、生物の中でも「子ども(赤ん坊)」とかなり限定されているので、対象が定まっていない「何か」とはそぐわないからである。

以上のように、目的語となれるものが相対的に限られている、すなわちカテゴリーが設定されていて、その中から目的語を指定する(96)(97)のような述語は、目的語に「が」もとることができる。

3.5 仮説の検証

この仮説が正しければ、先行研究の他動性で説明できた(B)動詞が漢語動詞であるとき(D)動詞が複合動詞であるとき、さらに先行研究で説明できなかった(A)動詞と目的語との間に何らかの要素が挿入されているとき(C)動詞が三項動詞であるとき、「が」をとりにくいことも説明できるはずである。

3.5.1 動詞と目的語との間に何らかの要素が挿入されているとき

(100) あなたの話を／?が皆と一緒に聞きたい。(久野1973:54)

(101) 私はいつか母のことを／?が小説に書きたいと思っているが、まだまだ私にはそれを書き分ける力がない。(『ほんとうの私をとめて』p.151)

(100)(101)のような文で「が」がとれないのは、大江(1979)の言う「焦点のずれ」からくるものであると考えられる。例えば(100)の文では、「皆と一緒に」に焦点がくる。つまり一番言いたいことは「(一人ではなく) 皆と一緒に聞きたい」ということであり、「(他の人の話ではなく) あなたの話を聞きたい」ということではない(但し、特定の部分に意図的にプロミネンスを置かなかった場合である)。にもかかわらず、目的語が「が」をとることによって、そこに焦点がきてしまうために不自然さが生じるのである。

(101)の文についても同様、最も言いたいことは「小説に書きたい」の部分であり、本来はここに焦点がくる。しかし、「母のことが書きたい」とするとここに焦点がきてしまうことになる。

文のどの部分に焦点がくるかということはもちろん文脈を考慮しなくてはならないが、一文の場合には、焦点のおかれやすい名詞というものがあるようである。

(102) 名古屋のみそきしめんを／が死ぬまでに一度でいいから食べたい。

(103) ビールを／?が北海道で飲みたい。(100/50%)

(102)の場合、最も言いたいことはおそらく「死ぬまでに一度でいいから食べたい」ではなく「名古屋のみそきしめんが食べたい」ということであろう。これは、「名古屋のみそきしめん」という名詞にカテゴリーが想定可能だからであると考えられる。つまり、「何が食べたいの?」という質問に対し、「(他の何よりも)名古屋のみそきしめんが食べたい」と答えているのだと考えられる。これに対して、「死ぬまでに一度でいいから」という部分に「死ぬまでに二度でいいから」「今年中に一度でいいから」などの他の候補を想定するとは考えにくい。

よって、あるカテゴリーの中から「名古屋のみそきしめん」を指定する、という「が」をとっても不自然な文にはならない。

一方(103)の文は、「ビール」にも「北海道」にも選択肢は想定できそうである。しかし、「ビールが」と「飲みたい」の間に「北海道で」が挿入されると容認度が落ちる。この理由は、「ビール」と「北海道」を比べると、「北海道」の方が相対的に見て選択肢を想定しやすいからであると思われる。また、「北海道で」が動詞の直前の位置にあり焦点がきやすいことも関係しているかもしれない。

但し、「ビールが」の部分にプロミネンスを置けば、「ビールが」の部分に焦点がくるため、容認度は高い。しかし普通のイントネーションであれば「北海道に」に焦点がきてしまい、焦点のずれが起きて容認度が落ちると考えられる。

このように、カテゴリーを想定できる名詞句に文の焦点がくるため、それ以外の名詞句に「が」を用いると大江の言う「焦点のずれ」が起き、文の容認度が落ちる。

3.5.2 動詞が漢語である場合

漢語動詞は2種類に分けることができる。

- (104) a. 目的語を必要としない漢語動詞 (勉強する、運転する等)
 b. 目的語を必要とする漢語動詞 (購入する、開始する等)

目的語を必要としない漢語動詞は、目的語を既に含んでいて、目的語がどのような範囲から指定されるのか、ある程度限定できると言える。このため「が」をとることができる。また(77)の表を見ても、「漢語を+する」と言い換えられる、つまり目的語を必要としない漢語動詞であることが、目的語に「が」をとる必要条件となっていることがわかる。

これに対し、(104b)の漢語動詞が「が」をとれないのは、上の漢語動詞に比べて目的語を指定するカテゴリーがまったく想定されていないからである。(105)(106)はこのタイプの漢語動詞で、「紹介したい」「期待したい」の対象が属する選択肢を想定することはできない。よって仮説により、目的語に「が」をとりにくい、と説明できる。

(105) ずっと片想いだった山下に初めて誘われてやっと運が向いてきたと思っ
たみのりでしたが、山下は婚約者を紹介したいだけだったのです。

(『ひり』p.64)

(106) 今回の「政権交代」が、日本人の革命意識に、また日本人のイメージアッ
プにつながることを期待したい。(『朝新聞』1994.8.1)

3.5.3 動詞が三項動詞である場合

単独の動詞である三項動詞と、複合構造をもつ三項動詞いずれの三項動詞も非常に「が」をとりにくいことは前章で述べた。これらの動詞は、必須項が2つであるため、2つの目的語のカテゴリーを想定しなくてはならない。2つの目的語のカテゴリーを想定するのは、1つの目的語のカテゴリーを想定することと比べて、より困難であると思われる。例えば、(107)の文においてもたとえ「貸す」の目的語の予測がついても「誰に」という部分は予測不可能だからである。

また、ある程度目的語のカテゴリーが設定されていなくては共起できない「何か」とは、三項動詞も共起できない。

(107) a. ? 何か貸したい。

b. 息子が困っているからお金をを／?が貸したい。

(108) a. ? 何か教えたい。

b. 留学生に日本語をを／?が教えたい。

(109) a. ? 何か継がせたい。

b. 長男に会社をを／?が継がせたい。

3.5.4 動詞が複合動詞であるとき

「踏み荒らす」のように前項、後項の格関係が一致するⅠ類と、「引き起こす」

のように後項が格関係を支配するⅢ類は動詞全体の他動性が高いために、他動性が低いことを表す「が」をとれないことを示した。これらの複合動詞も、また、単独の動詞であれば「が」をとれるにもかかわらず、アスペクト形式がつくことによって「が」がとりにくくなる「動詞+アスペクト形式」も、対象の予測がつかないことを表す「何か」と共起できない。すなわち対象の属するカテゴリーが設定できず、「を」しかとれない。

- (110) a. ?何か踏み荒らしたい。
 b. 畑を／?が踏み荒らしたい。
- (111) a. ?何か引き起こしたい。
 b. 事件を／?が引き起こしたい。
- (112) a. 何か食べたい。
 b. 晩ごはんを／が食べたい。
 c. ?何か食べてしまいたい。
 d. 晩ごはんを／?が食べてしまいたい。

3.6 談話における仮説の適用

仮説3「対象の属するカテゴリーが想定可能で、その中の選択肢から対象を指定する multiple-choice式の述語は、『が』をとることができる。」に反する目的語のカテゴリーが想定できない動詞であっても、談話内においてカテゴリーを設定すれば、「が」がとれるようになることを示す。

3.6.1 文脈によるカテゴリーの設定

一文では「を」しかとれないBグループの動詞も、文脈によって目的語の選択肢を設定することによって、「が」をとれるようになる。

- (113) a. ?生徒全員の名前が覚えたい。
 b. (新任教師とその友人の会話)
 友人「今度の赴任校は大きいそうだから、先生方の名前を覚えるだけでも大変ね。」
 教師「でも私、先生方の名前なんかより、生徒全員の名前が覚えた

いわ。」

- (114) a. ? 仏教が信じたい。
 b. 　　うちは両親が神道だけど、私は仏教が信じたい。

(113)は、文脈によって「先生の名前」「生徒の名前」という選択肢が設定されている。(114)は「神道」「仏教」という選択肢が設定されている。それぞれ、その2つの選択肢の中から、「生徒の名前」、「仏教」を指定すると、一文ではとりにくかった「が」がとれるようになる。

3.6.2 指示詞によるカテゴリーの設定

目的語に指示詞を用いると、「を」よりもむしろ「が」の方が容認度が高くなる。

(115) そうそう、私それ?を／が言いたかったのよ。

(116) 「大嘗閣の豚の空揚げか・・・うーん、太一め、あんな電話よこすから、
 なんだか無性にあれが食いたくなってきたな」(『Master Keaton 11』
 p.119)

(115)の場合、指示詞を用いることによって、「他の部分ではなく」という他を排除する意味がでる。他のものを意識するということは、やはりそこに選択肢が存在するということである。(116)は、目的語が前文から引き継がれているものだが、その目的語を指定し、「他のたべものではなく、あの空揚げが」と、他を排除している。

このように、指示詞によってもカテゴリーを設定し、その選択肢から目的語を指定するため、「が」の容認度が高くなる。

3.6.3 連体修飾によるカテゴリーの設定

- (117) a. ? ハエが殺したい。
 b. 　　あそこにブンブン飛んでいるハエが殺したい。

- (118) a. ? 仕事が見つけたい。
 b. 　　自己満足ですむ趣味程度の仕事じゃなくて、何か責任を伴うよう

な、自分にしかできない仕事が見つけたい。

(117)の「ハエ」は、一般的なハエの中から、目の前にいるハエであると指定している。また、(118)は様々な「仕事」の中から、「自分にしかできない仕事」と指定している。

以上のように、「が」をとれる対象の指定は選択肢というある範囲の中で行われる。但し、動詞のとる対象の一般性が高くて、以上の3つの方法で対象の範囲が狭められ、対象の一般性が低くなれば、「が」をとれるようになる。

3.7 まとめ

本章では、願望表現において「が」をとれる述語と「が」をとりにくい述語を分類し、その言語事実からどのような条件のもとで「が」をとれるのかを考察した。結果は以下のとおりである。

- ① 対象の属するカテゴリーが想定可能で、その中の選択肢から対象を指定する multiple-choice式の述語は、目的語に「が」をとることができる。一方、そのようなカテゴリーが想定不可能な述語は、状態性の接尾辞をとともなうにもかかわらず、「が」をとりにくい。
- ② この仮説によって、先行研究で指摘された「が」をとりにくい文が、なぜ「が」をとりにくいのかを説明することができる。
- ③ この動詞の語の意味から導いたこの仮説は、一文における「を／が」の選択のみならず、何らかの発話を引き継いだ談話の中の文にも適用することができる。すなわち、動詞の語の意味によって目的語が想定できなくても、文脈によって想定可能になれば、目的語に「が」をとることができる。
- ④ 一文における「が」と、談話の中での「が」は、いわゆる中立叙述の「が」と総記の「が」という違いがある。しかし、前者は動詞の語の意味によって、後者は文脈によって設定されたカテゴリーから指定される目的語にともなうことから、同じ環境で起こる「が」である、とすることができる。

4. 本稿のまとめと今後の課題

Sugamoto(1982), Fujimura(1989)のような他動性の概念を取り入れた先行研究に関しては、本稿の仮説3は動詞とともに目的語にも着眼したFujimuraのパラミターに近いと言えることができる。

大江(1979)は、「が」をとりやすいか否かという問題は「焦点の位置」「『-たい』がつく動詞が何かということ」「(述語の：引用者註)拍の長さ」の3つが関わっていると指摘したが、別個の要因としてとらえていた。

しかし本稿の仮説により、語彙的に「目的語が選択肢の中から指定されるため、必然的に目的語に焦点がくる」動詞が「が」をとりうるということがわかった。また、「拍の長い」述語は複合構造をもった述語も含まれるが、このような述語は目的語は選択肢の想定が不可能なので、「が」をとることができない、ということもわかった。よって、仮説3は大江が示した個別の問題点は、すべて関連があることを、包括的に説明できる。

今回は、「を／が」の交替が起こる述語として、願望表現のみを扱った。しかし、この他にも、可能表現「-(rar)eru」、「-てある」、「-やすい／にくい」をともなった述語なども、やはり目的語に「を／が」の交替が見られる。今後はこれらの「を／が」の選択条件も考察対象に含め、本稿の仮説の信憑性を高めることが必要である。

< 註 >

- 1) Shibatani(1977)は、述語と「目的語+が」の距離が離れると、聞き手が「目的語+が」を「主語+が」と理解してしまう可能性がある、という知覚的なストラテジー (perceptual strategy)の問題として説明している。
- 2) 直接目的語助詞規則(ア) (柴谷1978:236)
状態述語と共起する直接目的語に「が」を付与せよ。
- 3) 直接目的語助詞規則(イ) (同上)
直接目的語に「を」を付与せよ。(但し、既に直接目的語助詞規則が適用されている場合には随意的。存在の述語その他のある述語を含む文には不適用。)
- 4) このアンケートは、50人のインフォーマントによって行われたものである。
- 5) 格助詞の容認度が高いか低いか迷った例文については、例文の後ろの()内に50人のインフォーマントによるアンケートの結果を示す。容認度の高い文であると80%以上のインフォーマントが判断したものにはいかなる印もつけない。10%未満の場合は*を示す。10%以上80%未満の場合は?を示すこととす

る。(98%／16%)の場合、「を」の容認度が高いと判断した人が98%、「が」の容認度が高いと判断した人が16%いたということである。

- 6) 「無くす」「落とす」など、マイナスの意味で用いられやすいと思われる動詞は一見願望を表す「-たい」とはそぐわないが、(i)(ii)のようなごく限られた状況においては、容認度の高い文も考えられる。

(i) この世から戦争を無くしたい。

(ii) あの学生を落としたい。

このような例からもわかるように、ある願望を表す述語を見たときに、どのような状況、どのような目的語を思い浮かべるかは個人個人のもつ経験によって異なり、「が」とれるかどうかという判断も個人個人が異なった状況を思い浮かべた上で行っていることになる。一定の状況のもとでそれぞれの願望表現が「が」とれるかどうかを判断できないということからも、(70)の表におけるAグループとBグループの境界線は一定のものではあり得ない、ということが言える。

- 7) 久野(1973)は、このような無標の文における「が」を中立叙述、有標の文における「が」を総記と呼んで次のような例を挙げている。

(i) 中立叙述を表す「ガ」:

雨ガ降ッテイマス。

オヤ、太郎ガ来マシタ。

(観察できる動作・一時的状態を表わす)

(ii) 総記を表す「ガ」

太郎ガ学生デス。

(「(今話題になっている人物の中では)太郎だけが学生です」の意味)

(久野1973:28)

この「が」が中立叙述を表すのか、総記の意味をもつのかは、その文の発せられる状況による。「水が飲みたい」という一文を見ただけでは、この「が」がいずれの意味をもつのかははっきりしないが、談話の冒頭で「ああ、水が飲みたい」と言えば中立叙述、「飲み物、何が飲みたい?」と尋ねられて「水が飲みたい」と言うのであれば総記、ということになる。

- 8) ここで言う述語とは、「動詞+接尾辞」という複合構造をもつものことで、「飲む」などの単独の動詞や、「美しい」などの単独の形容詞などと区別する。

- 9) この用語は久野(1983:129)によるもので、(i)は「車で」の部分に焦点があり、(ii)のような「マルチプル・チョイス式」のインフォメーション構造もっている、という例示がある。

(i) 僕は、車できた。

(ii) 僕は、 $\left. \begin{array}{l} \text{歩いて} \\ \text{自転車で} \\ \text{バスで} \end{array} \right\}$ 来た。

〔 車 で 〕

10) ここで言うモノとは、物理的に存在する実体のことと考える。

< 参考文献 >

- 庵 功雄. 1995. 「ガ～シタイとヲ～シタイ—格標示のゆれに関する一考察—」
『日本語教育』86号. pp. 52-64.
- 石井正彦. 1987. 「複合動詞の成立条件」寺村秀夫他編. 『ケーススタディ日本文法』桜楓社. pp. 56-61.
- 大江三郎. 1979. 「願望のタイの前でのヲとガの交替」『論集日本語研究7 助動詞』有精堂. pp. 52-61.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 久野 暁. 1973. 『日本文法研究』大修館書店.
———. 1983. 『新日本文法研究』大修館書店.
- 小泉 保他. 1989. 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店.
- 菅井三実. 1993. 「構文スキーマ理論序説」『名古屋大学人文科学研究』第22号
名古屋大学大学院文学研究科人文科学研究編集委員会. pp. 33-50.
- 杉本 武. 1986. 「格助詞」奥津敬一郎他. 『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社.
pp. 227-80.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
———. 1991. 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版.
- 長島善郎. 1976. 「複合動詞の構造」鈴木孝夫編. 『日本語講座 第4巻 日本語の語彙と表現』大修館書店. pp. 63-104
- 丹羽哲也. 1988. 「有題と無題文、現象（描写）文、助詞『が』の問題（下）」
『国語国文』第57巻. 第7号. pp. 29-49.
- 堀川智也. 1988. 『日本語格助詞の意義素分析』東京大学大学院人文科学研究科
修士論文.
- 益岡隆志. 1987. 『命題の文法』くろしお出版.
- 森田良行. 1988. 『日本語の類意表現』創拓社.
- ヤコブセン、ウェスリー・M. 1987. 「他動性とプロトタイプ論」久野 暁、柴
谷方良編. 『日本語学の新展開』くろしお出版. pp. 213-48.
- Fujimura, I. 1989. "Un cas de manifestation de degré de transitivité:
l'alternance des relateurs Ga et O en japonais". Bulletin de la société

- té de Linguistique de Paris. pp. 235-57.
- Hopper, Paul J., and Sandra A. Thompson. 1980. "Transitivity in Grammar and Discourse". Language. 56:2, pp. 251-99.
- Jacobsen, W. M. 1992. The Transitive Structure of Events in Japanese. Kuroshio Publishers.
- Wakino, S. 1976. "On the nature of the Japanese potential construction." Papers in Japanese Linguistics. vol. 4. pp. 97-124.
- Shibatani, M. 1975. "Perceptual strategies and the phenomena of particle conversion in Japanese." Papers from the Parasession on Functionalism. pp. 469-80.
- Sugamoto, N. 1982. "Transitivity and Objecthood on Japanese". Syntax and Semantics, 15. Academic Press. pp. 423-27.
- Tada, H. 1992. "Nominative Object in Japanese." Journal of Japanese Linguistics. vol. 14. pp. 93-108.

いくた ゆうこ (日本語文化専攻)